

故 鈴木礼暁先生を偲んで

竹 川 雅 治

月日の経つのは早いものである。鈴木先生の訃報に接してから、もう1年近くがたとうとしている。先生が闘病中に、何度かお目にかかったことがあるが、「来学期からはようやく授業に復帰できるようになった。今はそのためにシラバスを考えている」と嬉しそうに話をしていた鈴木先生を思い出す。過日、「札幌法学」の編集担当者から鈴木先生の追悼号をだすから、何か文章をという依頼を受けた。研究誌に論文でなく「雑文」を掲載するというに若干の心苦しさもあるが、鈴木先生の追悼号ということで、今少し、同僚であり、友人であった故鈴木礼暁先生の思い出にふけることを許しただきたい。

鈴木先生、商法の土井先生そして私は、昭和49年4月に札幌大学に赴任してきた、いわば「同期の桜」である。そうしたこともあって、我々は鈴木先生を名前の礼暁（のりあき）と言わずに、親しみをこめてレイギョウ先生とかレイギョウ君と呼んでいた。

赴任した昭和49年には、法学部がまだ設置されておらず、鈴木先生は教養部にそして土井先生と私は経営学部にも所属した。当時の札幌大学は設立されてからまだ10年も経過しておらず、学内の運営では、設立者である理事長の影響力が色濃く残っていた。そんなこともあってか、学内では「〇〇体制の打破」、「教学権の確立」、「大学らしい大学を」などといった声がいつも声高に叫ばれていた。赴任早々で、あまり詳しい事情がわからない我々にとっても、こうした主張の源にある「札幌大学を自分たちの手で、より良い大学にしていこう」

とする当時の教職員の大学教育に対する並々ならぬ熱意、そして設立して間もない札幌大学への強い期待感などが、たいへんよく伝わってきていた。「新参者」であった鈴木先生も私も、そうした中であって、多くの発言をする機会に恵まれ教学側のこうした動きに積極的に参画していった。そうしたことが、教学による札幌大学の「基本計画（第一次）」の策定に参加する機会が与えられるにいたったのである。このことは、結果としてやがて、法学部設立へとつながる足掛かりをとったのである。さらに鈴木先生は、後年、法学部長となり、さらに自治行政学科の設立へと精力的にその先頭に立たれ、教学側の立場からの大学運営にも積極的に関与されることにもなるのである。

赴任当時、鈴木先生とは住まいがたまたま隣であるということもあって、札幌大学の状況、これからの大学教育の在り方、はては教授方法などについて、時には夜遅くまで酒を酌み交わしながら、話し合ったものである。この時に話したさまざまな計画や構想は、やがて、そのいくつかが実を結ぶことになった。たとえば、法学や政治学を学ぶ学生に明確な目的意識を持たせたいと語った思いは、資格取得を目的とした「特別講義」に、生の地方行政を学ばせたいと話し合った計画や構想は、市町村長による「リレー講座」の開設へと、さらに、高校生による出身地の活性化策を聞こうとする思いは、高校生による「まちづくりの論文」の公募の実施というように、法学部教育の特色の一つとして実現してきているのであった。

鈴木先生は、大学院時代から政治思想史、特にフランスの政治思想、特にルソーを研究対象としたかったようである。そのために東京の「アテネ・フランセ」に通ってフランス語を勉強されていた。あるとき、ふと何気なく「どれくらいフランス語がわかるの」と聞いたことがある。その時、鈴木先生は「多分、僕はフランス人とフランス語でケンカできるよ」と笑って返事をされた。フランス語には相当な自信があったようだ。そのことは、「札幌法学」第14巻第2号に、「Le developpement et l'etat actuel de la democratie municipal en

France」という仏文の論文が証明している。いくたびかのフランス留学を経て、鈴木先生は、その研究対象を、政治学、とくにこフランスの地方政治へと広げられていった。そして、先生は先のフランス語の論文、また「フランスにおける地域民主主義の発展と現状」（札幌法学 9 卷 2 号、10 卷 1・2 合併号）というタイトルの論文でその成果を札幌法学に発表された。またフランス留学の前後から、Orleans、Nancy、Strasbourg、Lyon など多くの市長とのインタビューを企画されて、その成果を「フランス地域民主主義の現状」（札幌法学 16 卷 1 号、2 号、17 卷 1 号）という論文を札幌法学に発表している。その中で、鈴木先生は、「フランスの地域及び国家での民主主義の可能性を提示することである」とその研究目的を述べられている。

政治学の分野における民主主義という最も重要な課題に、鈴木先生は大いなる情熱を傾けて研究されていたということは、政治学に門外漢である私であってもよく理解できる。今となっては望むべくもないが、もう少し、鈴木先生と、フランスばかりでなく、今日の日本における民主主義の現状について、話が聞けたらという思いがしている。

字数も尽きたようだ。大学で教職にある時間もそんなに長くはないという時期に、長い間、同僚として、友人として、畏怖の念を持って眺めてきた鈴木先生を失ったことは、私にとっても痛恨の極みであることは間違いない。葬儀の場に「葬儀委員長」として臨むつらさはやりきれないものがあったが、今はひたすら「レイギョウ先生」の冥福を祈るだけである。

鈴木礼暁先生 さようなら。そしてありがとう。